

## 頭（こうべ）を上げる

### I. 初考

確定申告期、毎日仕事に埋没して長時間机に向かっていると、頭の鮮度が落ちる。そこで、時々意識して頭を上げることは有用だ。頭を上げるとは、物理的に頭を上げて外の景色や空を見上げるだけでなく、精神的にも全く違った世界に思いを致すことが大事だ。つまり、花鳥風月です。いま、草木を観ると、厳しい寒さに耐えてきた樹木が立春を迎えてしっかりと春の準備を整えている。朝の散歩で見つけた夾竹桃の木は、歳頃なら、12～13歳の少女を思わせる蕾をもう用意していた。鳥のさえずりに心を癒し、風の音に季節の移り変わりを感じられる感度がないと仕事もマンネリ化する恐れがある。

そこには、人間の科学の世界を越えた神秘の世界がある。

### 2. 本考

ところで、人間は死んだら何処にいくのでしょうか？ この世に生を受けたもの、つまり、人間だけでなく、生きとし生けるもの、あらゆる動植物全てのものが必ず死ぬのだが、意外と其のことに關しては、関心が低いようです。極楽、地獄は在るのだろうか？ 現世の行いによって其の行き先は変わるのだろうか？ 地球上には、60億を超える人間が存在するが、その報告のできる人はいないのです。

さらば、そのヒントとして、人間の来し方を観てみようか。行き先が判らないのなら、いま、現存する人間のその来し方を観る事で何が判るかもしれない。

まず、現象的に確認できること、それは、我々は、母親の体内から出てきたと言うこと、これは、紛れもない事実。しかし、母親が子を出生するには、精子と卵子の結合が必要だ。つまり、父親の存在がなければなりません。つまり、一人の子供には二人の両親がある。そして、その両親にもまた、それぞれ両親がある。そのようにして、自分から25代遡った親の数は、何と、33, 554, 432人となります。これが、仮に、仮説に従って、人間が約十億年前に生まれたとするならば、我々は何百兆か何千兆かの先祖の命を引きついでいることとなります。

さて、そのような事実のなかで、次の疑問だ。あなたは、あなたの両親の生まれる前、どこにいたのですか？ どんな姿だったのですか？ 何処かに居たから現存しているのでしょうか。千の風に乗って、そこらを飛んでいたのかもしれないですね。

このように突き詰めていくと、己の本質には、形も相も、臭いも色も味も、手で触れる何ものも無かった、ということであり、時間も空間も超えた、一切の現象を越えたところに本当の自分がいたのだな、と領けるようになります。つまり、己の本当の姿は空だった、と言うことになってきます。

人が死ぬと言うことは、人の魂を入れた肉体が消滅することで、魂は人が生まれる前の姿に戻っていくのではないだろうか。だとすると、死によって、また、千の風にもどり、先に死んだ両親や先祖の皆さんにまた会える？ 実は、我々の目には見えないだけで亡くなった先祖は、千の風によってわれわれの周りを常にとんでいると考えると実に楽しいですね。

我々は、自分の目で見たり、耳で聞いたり、鼻で臭いを嗅いだり、手で触ったりして確認出来るもの、つまり、現象確認出来るものでないと信じてきませんでした。しかし、人間の聴力は鳥たちより遥かに劣るし、臭覚は犬には遠く及びません。そんなもので確認できるものをもって、それが実相だと思い込んでいたわけですが、実は、それは、虚像であって本物ではなかった訳です。宇宙には人間の遥か及ばない世界が存在するわけです。

ところが、我々はそのような虚像を見ているにもかかわらず、人が生まれてかこの方、多くの経験を持ち、その経験のなかで知らずしらずのうちに、発想法に癖が出来上がり、それが固まってしまいます。これを、仏教の世界で「薫習（くんじゅう）」と呼ぶそうです。

この、薫習を取り払うこと、つまり、物事に住著（じゅうじゃく）しない訓練をすることで、頭の中をつねにクリーンにしておくことが重要です。

### 3. 終考

とにかく、人が生きるということは、平凡のようで奇跡中の奇跡である。膨大な先祖の命を引き継いでこの世に生をうけた人間の命は、ただ一つの命ではなく約50兆の細胞からなる生命共同体であるといわれている。それが、日々無事であるなどということは、不可思議なことこの上ない。おそらく、廣大無辺の全宇宙でも人間生命に匹敵するほど靈妙不可思議はなかろう。それはもう、科学をこえた祈りの世界である。よって、今日一日この奇跡を生きる命を与えられたことに感謝しよう。そして、それは喜びに変わり、やがてそれは自己を拝み、他を拝み、更には、全宇宙を拝むことになる。

このエネルギーを無駄に使ってはならない。宇宙の大きな恵みを受けてこの世に生を受けた我らは、このエネルギーを多くの人が喜びと勇気と希望を享受できるように使わなければならない。

今後、私は人の喜びの為に生きる。

以上

平成22年3月1日 全体会議挨拶より

アイクス税理士法人 代表 飯田 昭夫